

2024年7月

『家庭のない家族の時代』 小此木啓吾／著 ABC 出版 1983

2024年8月

7月の課題本から広げる

◆◆◆8月の読書会から

今月の読書会は、7月の課題本『家庭のない家族の時代』から参加者が各自選んだ本読みました。

絵本や小説、コミックなどいろんな分野の本が紹介されました。先月の課題本を読んだ時は「難しい」「どう捉えてよいかわからない」という声も聞こえましたが、みんなが選んだ本とその感想を聞いて色々な角度から先月の課題本をとらえることができたのではないのでしょうか。

参加者が選んだ本は以下のとおりです。

著書名	作者・著者	出版社・出版年
裁判官 三淵嘉子の生涯	伊多波碧	潮出版社・2024
夢見る帝国図書館	中島京子	文藝春秋・2019
マダムたちのルームシェア	seko koseko	KADOKAWA・2022
ぱくりぱくられし	木皿泉	紀伊國屋書店・2019
新家庭論	堺利彦	講談社・1979
ドナウの旅人	宮本輝	朝日新聞社・1985
家族を「する」家	藤原智美	講談社・2004
家族の原風景	宮原安春	論創社・2004
りんごの花	後藤竜二／文 長谷川知子／絵	新日本出版社・1993
家族だから愛したんじゃなくて、 愛したのが家族だった	岸田奈美	小学館・2020
現代人の心理構造	小此木啓吾	NHK出版・1986
800番への旅	E.L.カニスバーグ／作	佑学社・1987
フロイトとユング	小此木圭吾・河合隼雄	第三文明社・1989

(文責:森下)

『家庭のない家族の時代』(小此木啓吾著 1983年 ABC出版)を課題本にして

吉川五百枝

【ワン プラス ワンの読み 『現代人の心理構造』小此木啓吾 1986年 NHK出版】

7月の課題図書は1983年に出版されてから40年経過している。つまり戦後40年を経過した時代に書かれた本を、さらに40年後の今、読み直しているということだ。

第2次大戦は、日本の社会を大きく変えた。憲法が変わり、民法が変わり、教育が変わった。戦後79年となる現在を考える時、その半分の時、小此木啓吾という精神医学者は、どういふ変化をみていたのか。

著者の小此木啓吾氏の名前は、同時代人の臨床心理学者河合隼雄氏と共に蘇る。

河合氏が1928年生まれ、小此木氏が1930年生まれ。かたやユング派、こなたフロイト派と、理論では異なる道を選んでいる。

私は40年前、河合氏の著書やサークルの講義でユング心理学を知った。河合氏の『母性社会日本の病理』(1976年)などが出版され、日本の社会が持つ光や影が明るみに出てきたというのが当時の感慨だった。フロイトやユングの心理学が紹介され、国内では、それに関係した本が沢山出版された。

私はどちらかという、小此木氏より河合氏の話の方が自分には近い気がしていた。二人の違いは、使われる言葉にも現れる。小此木氏の「断念」を河合氏は「死と再生」と表現する。

小此木啓吾氏と言えば、40年経った今でも「モラトリアム人間」(1979年)とか「シゾイド人間」「ピーターパン・シンドローム」などという活字が思い出される。そして、なにより覚えて居るのは、家族の形態をそれぞれの特徴に分類し、思いがけない名前をつけていることだ。「コンテナ家族」とか「サナトリウム家族」などは、その名付けのおもしろさで忘れないでいる。それぞれのグループ名は比喩である。

戦後の40年で、生活環境は大きな変化を起こしていた。最短の効率の良さが中心課題となり、試行錯誤の経過より結果の数値が求められた。その変化のカーブが急角度になり始めると、各駅停車の暮らしは、新幹線なみになり、心模様もガタヒシ(我他彼此)とゆれて今に至る。

『家庭のない家族の時代』の表紙を見たときには思い出せなかったが、開いて読み始めると、なんと、あの「ナントカ家族」のオンパレードだった。あった、あった、という感じである。私が40年前に読んでいたのはこの本だったのだろうか。

文化人類学や心理学の本が、専門課程を経験していない身でも、身近に手に取りやすくなったのは、河合氏、小此木氏に続く学者さん達のおかげだった。

小此木氏の著書に見えるのは「ピーターパン」という男の子の物語であつたり、「ソフォクレスの悲劇」を基にしたエディプスの物語であつたりする。河合氏は、日本でも流通している児童文学の本を取り上げて説明する。『思い出のマーニー』(ジョーン・ロビンソン)や『まぼろしのトマシーナ』(ポール・ギャリコ)などが題材にされていた。物語では、具体的に、家庭人だったり、親だったり子だったりするが、そういう外側にも現れる関係性を語りながら、存在の基

本を成す社会の中の個人の縦糸横糸を丁寧に紐解く。それを思い出すと、1975年から80年代にかけての私の学びは、新しいことを教えてもらうという膨張の階段と共に、敗戦後の40年間を言葉として整理してみる振り返りの時でもあった。そして更に40年。この度、課題本になったおかげで、久しぶりの小此木氏との対面になった。

「家庭」と「家族」との違いが例会で話題になったが、辞書的な定義付けよりも、その〈家庭〉と〈家族〉の対比の特徴は何であったかを考えたい。「〇〇家族」という分類の特徴は、決して古語にはなっていないと思う。ただ、説明のために述べられる例話は、40年という経年劣化をおこしているのだから、例会では、散々やり玉に挙げられていた。だが、小説ではないので、例話で当てはまらないことは通り過ぎれば良い。今でも、相変わらず戦前の太い尻尾を引きずっていることもあるのだ。世の中の仕組みと個人との関係性の違いが、論じられる。

40年前、小此木氏が、時代の流れをこんな風に記している。

「20世紀初めには、大人の精神医学が一応できあがった。1930年代に児童精神医学が、1950年代には青年(若者文化とか)精神医学が誕生、1970年代には思春期の子供の(登校拒否、家庭内暴力など)青春期精神医学が新しく登場、そして、今後(1980年代の著作だから)高齢化する社会の中年、老年の精神医学の領域、更に新しい領域として乳幼児精神医学が注目されるだろう。」

「現代の様々な価値観は、相対的な価値観となり、普遍的な道徳心などないのだから、自分らしい自我のあり方を見つけていけば良いという考え方が優勢になる。そして、エゴイズムとエゴイズムがぶつかり合うナマの形が人間関係の中に起きる。」

40年前の観察や予測は、今、現実の関係性として生々しい。

【更にプラスワンの読み 1987年邦訳『800番への旅』カニグズバーグ作】

小此木氏が、日本の家庭や家族を総体の問題として著作をされていたころ、論文中に見えるアメリカの家庭と家族の状態はどうなっていたのか？

1980年前後、アメリカの児童文学でニューベリー賞を受けた注目の作家カニグズバーグが、次々と小説を発表し日本でも評判になっていた。翻訳されると片っ端から読んで、面白いと思っていたが、描かれた社会の様子が想像出来ず、遠い気分の本が『800番への旅』(1982年執筆)だった。そこでは、あっちでもこっちでも離婚。決まった収入もなく、知り合う人達も、それぞれにその人のやり方で仮暮らしでも愉しげだ。だが、私には重ねられる人も近くにはいない。気になる小説でも理解できないまま本棚に置いて約40年が過ぎた。

この度1980年代にこだわって本棚を見ると、『800番への旅』が目についた。

読み返してみると、ちっとも遠い話ではない。そして今の世の中が、多様性という価値観に重点を置いていることに気付いた。多様な環境の中にいる自分が、他と共に生きること。『800番への旅』の世界がそこにある。時を違えて読むと、人生という織物の柄と地の面積が違って見えるのだと思う。

『家庭のない家族の時代』から広げる

◆【KH】

「家庭のない家族の時代」

1ヶ月前の読書会、さらに今月の読書会を経ても、困ったなあ、何をどうまとめて良いものか。。

家族観が大変に多様化して(価値観というべきか)日本の旧来の家族観はほぼ消え去ったこと。崩壊した家庭の中で、子どもを育てることは困難であり、新しいヒューマンネットワークが形成されるべきであるという筆者の主張ももつともだと思うが、今やすべてうまく機能しているかどうかは別として、40年前に比べたら、ヒューマンネットワークは随分と作られて(変化して)いるように思う。我が子たちを見ても、妻と夫は同志という感じだし、今の子どもたちは、確かに家庭で過ごす時間は短い。有り余る暇を持って余し、こんな暇な時があと2年半は続くのかと、中1の夏ゾツとしながら考えていた変なやつだった私。

でも、持て余すほどの暇を存分に味わえたことは、今となっては幸せだったのかもと思ったりもする。今や、“家”は放課後、学童やお稽古事を経て、食事をし、風呂に入り、つかの間の休息の後に眠る場所。かもしれない。親も、子も皆忙しい。これも登場して久しい“ワンオペ育児” どうにもこの表現に馴染めなかった。育児はオペレーション(操作)の対極にある人の営みだと思うから。しかしワンオペと表現せざるを得ないほど、孤軍奮闘している親は身近にもたくさんいる。歯車がどこかで食い違ってしまったのか。

忙しい、忙しいと口にしながら、口にせずとも、心を亡くしながら(こんな事言っちゃいけないが)大人も子どももどこへ行こうとしているのか。何か手がかりになる本を探して、お盆休みに考えてみることにした。

『家族』『家庭』をキーワードに図書館で検索してみたら、誠に多種多様な本がヒットした。

様々な理由により、シングルマザー、シングルファザーとなり、いやたとえ夫婦揃っていたとしても、父性性、母性性両方を発揮してちゃんと子どもを育てあげている方々の本も。でも、これから取り上げる本は、夫婦と子どもというユニットの家族ということが前提の本だと(著者もそう語っておられる通り)いうことだ。

「家族をする」え??とこの『する』に引っかかって、手にとったものの、最後まで読むと、これは家族観を箱としての“家”から捉えて、子どもが問題行動や非行へと走らないための考察をまとめた本ということかな。。読書会ででた話とは、全く違う方向を掘ってしまった感は否めないが、ごめんなさい。このまま、下記の本をもとに考えたことを書くことにします。

前書きを引用すると

現代家族はただ夫婦と子どもが、住まいという空間の中で同居していれば、自然に成立するようなものでなく、強い意志を持って営まなければ、あるきっかけで簡単に瓦解するのだ、という主張も込めた。いま、家族は自然に「なる」ものではなく、意識的に「する」必要に迫られている。(中略)

現在は、10歳違ふと、もう言葉が通じないなどと言われる。

現実には、10歳以上の開きがある「他者」が「共同生活」するのが家族だ。

～～～若い世代にとって、「家族する」という言葉はごく自然。

「仕事する」「勉強する」「部活する」などと等価値

彼らにとって「する」があればその対極に「しない」という選択肢もある。

「家族しない」という態度の子供だって出てくる。イヤ、親の中にも「家族しない」

ものいる。～

家族するから派生して、夫婦する、親子する もありなのだろうか。

この本は、小此木さんの本が出てから、約20年後の出版。
もう20年前の本だから、いまとは状況が随分変わっているかなと思ったが、アメリカの影響、テレビだけでなく圧倒的に物質的に豊かなアメリカから流れてきた「物」「文化」への憧れの気分は、60年生まれの自分としては、世代的にまさにドンピシャで当てはまり、あーそういう時代に、わたしはかなり無自覚に生きてきたわけだと大変に納得できた。

1980年代、郊外の分譲住宅地を取材したという著者は、狭いながらも庭に芝生を植えた(アメリカの住宅のように)家が多かったのに、20年後、芝生は消えさり、庭はコンクリートやレンガで固める家ばかり。庭の手入れを始めとするDIYは日本には根付かなかった。
筆者の分析によると、開拓時代に築かれた「自律精神」に価値を置く彼らの精神的風土と、芝刈りや、日曜大工がぴったりとマッチしたからに違いない。と。日本ではアメリカ人のような歴史や精神性とDIYは当然つながらないと。

初代の居住者世代(1970年台に家を立てた世代)がほぼいなくなり、実家(まさに郊外の分譲住宅地)を思い浮かべて、ウンウンその通りとうなづく自分。

1950年代 アメリカの都市生活者が郊外の分譲住宅を手に入れる。それまでのしがらみ

やコミュニティの軋轢から解き放たれて自由な気分を満喫した。反面新しい環境でどのように家族を営み、近所とどのように付き合うか—そのモデルとなったのが、テレビだったという。それが、そっくり20年ほど経って、日本にやってきたというわけだ。ただし、物や情報はたくさんアメリカから入ってきたが、当然のこと、歴史観や宗教観を基にした家族観は、輸入できなかったし、根付くものではない。というのが筆者の主張だ。

この、物質攻勢が、小此木さん曰くの『黒船』??

現代の黒船といえば、すでに入ってきて久しいが、やはり情報化の波に乗ってやってきた情報機器、通信機器、諸々のデジタルツールおよびソフトウェアか?

筆者は、後半、家の間取りを視点にして家族観を述べているが、そもそも家の中心に位置する広々としたリビングルームがもはや、家族の団欒の場ではないと述べる。

家族は「家族をする」ため、リビングに集まりはしても、一緒に同じテレビを見るわけでも、対話を楽しむわけでもない。みんな自分の携帯を通してそれぞれの“外”と繋がっている。

～以降～望ましい間取り論が展開される。望ましい間取りは、リビング廃止(縮小?)説から、夫婦の寝室重視説へと、展開する。そのココロは、家族、中でも夫と妻が、家族の核であり、夫婦が対話するための“言葉”を取り戻し、子どもが自らのことを語る“言葉”を育むこと以外に、家族が存続するすべはないのではないかと。家族の核は、夫婦であるという価値観は、キリスト教的な、絶対揺るがないものとして、別の本で、宇宙飛行士 向井千秋さんの夫(万起男氏)も紹介していた。日本では、子どもが生まれると、家族の中心は子どもになるなあ、確かに。。。

もちろん、ここで使った家族(夫と妻、子ども)という構成だけではなく、どんな家族形態であろうと“家族”は存在し続けるだろうと筆者は締めくくっている。枠にはまらない新しい家族であればなおのこと、お互いが個の意見を確立し、互いに過分に寄りかからず、精神的には独立している人間関係が理想。かもしれないが、日常の瑣末なあれこれまでも、すべて話し合いとかいうのは、とても疲れてやってられないように、わたしなんぞは思ってしまう。きっちり独立した個を持っていれば、瑣末な事にはこだわらず、気持ちよく暮らせるのではないかと思ったり。

年取ったら、気心の知れた同性の友人と付かず離れずで暮らしたらどんなにか楽しそう。と夢を見ていたが、体力的に自立不能になったらケア付き老人住宅に入居することになるのだろうか。それでも最後のよりどころ。精神の自立だけは保っていたいと切に願うけれど。その時が来なければ、わからない。結局どんなに理想を掲げていても、目の前の現実を引き受けて生きるしかない。

大切な同居人とのコミュニケーション。それはともに暮らすためには欠かせない、というかそれなしには「家族する」ことは成り立たないとわたしも思う。情報の洪水の中を生きていて、感情や会話、コミュニケーションがどんどん細切れに、簡略化することは、おそらくよいことはないと思う。通じにくくても、伝え合うこと。どこにいても、どんな暮らしをする事になっても、思い、考えていることは言葉にして、やりとりしていくことが、生きる幸せだと、わたしは思う。

煙たがられても、面倒と思われても、考えていること、思っていることは、やはり言葉にしないと伝わらない。これだけは確かなことだと、猛暑の中考えた。

◆【 MM 】

先月の課題本はフロイト研究の日本における第一人者と言われた精神科医、小此木圭吾の本だった。40年前に書かれた家庭の話、これからの家族はどうなるかなど、理解するのが難しかった。今月の自分で選ぶ本には、フロイトとユングの話が出たので彼らを扱った本があればいいなあと探して『フロイトとユング』という小此木圭吾と河合隼雄の対談の形で出版された本を手にとった。河合隼雄は以前吉本ばななと共著を出していたので見たことがある名前であり、とっつきにくかった課題本からなにか理解するヒントがつかめれば…という期待もこめて読み進めた。

フロイトとユングはともに心理学者、そして精神科医である。心理学は私にとっては身近な言葉だ。学問というよりも、生きる助けになる考え方として活用している。子供の頃は心理学テストを友達と楽しみ、成人してからは心理学として読んだ本として思い出すのがジョハリの窓についてだ。その後は以前課題本で出会った『嫌われる勇気』がきっかけでアドラー心理学が気に入り、見かけたら読むようにしている。

『フロイトとユング』では二人を対比させることによって違いが見えやすくなると感じた。フロイト(1856-1939)の心理学はエディプスコンプレックス、男性性を強調し、ユング(1875-1961)は一人の人間の中には、男性性・女性性の二つの性質があると考えた。(男性の中にある女性性＝アニマ、女性の中にある男性性＝アニムス)

先月の読書会ではユング心理学の考え方が日本で受け入れられたのは仏教が女性性の要素があることに関係がある、という話が出た。「女性性と東洋思想」の解釈がうまくできなくて、今月の読書会で吉川先生の話聞いて、その後、見返してみると本にも書いてあって納得した。西洋思想(キリスト教の思想)は善と悪、二元論的な考え方だが、東洋思想(仏教)は悪をも内包している、すべてを包み込む(母性が強い)と。

本の中には二人の性格の違いも書かれており、フロイトは同性愛の傾向があったようだ。弟子と近くなりすぎて衝突して離れる。ユングもかつてはフロイトの弟子だった。アドラー(1870-1937)もフロイトがユングを可愛がりすぎたため嫉妬で離れていった、という記述があって驚いた。ユングは女性の弟子が多く、研究者であり愛人でもある女性がいたようだ(一人ではないらしい)。

この本は、フロイトとユングが活躍した時代のユダヤ人問題、ナチ、宗教も関わってきても難解だった。また、小此木圭吾と河合隼雄の対談という形式も、一つの話からいつのまにか違う話題に移っていて、初心者にはとてもハードルが高い本だった。でもフロイトとユングについて様々なエピソードを知って、彼らも人間なんだと身近に感じる事ができてよかった。